

エコ・あぐり・タウン くねっぴ 応援団だより NO.17

訓子府町の「ふるさと応援団」にご参加いただき、ありがとうございます。みなさまと訓子府町を結ぶ便りにできればと考えております。

★ 福祉講演会開催（デンマークの事例から）

本町出身の澤田真智子さんを講師に迎え、2月17日と18日の2日間、「安心して暮らせるまち～誰もが地域で生活するために～」をテーマに福祉講演会が町公民館で開催されました。

澤田さんは、駐日デンマーク大使館に勤務された後、デンマークの介護や看護を医療現場で研修し、現在は社会福祉士としてマギーステーションの代表を務めておられます。



講演では、デンマークの社会保障制度の充実度や、ご自身が運営するナーシングホーム（高齢者、障がい者施設）の現場も紹介し、「支え合いと思いやりの豊かな社会生活を送ることが大切」と話されました。

応援団トピック

★ 第9回オホーツク玉入れ選手権大会

オホーツク玉入れ協会と町教委が主催する標記大会が、町スポーツセンターで2月20日に開催され、町内外から一般31チームとジュニア9チームが参加し、熱戦が繰り広げられました。

玉入れ競技は、高さ4m12cmで直径44cmのバスケット（北海道和寒町が発祥の地で、この町の最低気温 41.2℃、北緯 44°に位置することに由来）に百個の玉をいかに早く入れるかを競います。一般の優勝タイムは27秒91で訓子府ジャージースが昨年度に続いて勝者となり、賞金10万円を手に入れました。



H23・住民参画の常設組織が始動

平成20年度から2年間取り組んだ、住民参画についての学習などを経て、さらに8名の委員による具体的な検討作業から、昨年の10月に本町の実情に合った住民参画の仕組みとして、「常設組織の設置」と「情報共有の環境づくり」が示されました。

町はこれを受けて、町長の政策決定段階における住民意見の反映と、町内全自治会が抱える地域課題の解決を目指す組織として「まちづくり推進会議」を4月からスタートすることとしました。2月25日には、町内29自治会から推薦された「まちづくり推進委員」が出席して、事前説明会と研修会（講師：河合博司教授）が開催され、今後の活動に向けて心構えを新たにしました。



甘草の人工栽培に挑戦

高齢者クラブ「幸楽会」が 薬草栽培の町「訓子府」の復活を目指す

漢方薬に用いられる生薬「甘草（かんそう）」の人工栽培に手探りで取り組んで3年が経過し、薬効成分が十分に含まれているという分析結果が得られました。挑戦を続ける、及川さんと浦山さんは「新たな特産品づくりにつなげたい」と次の目標に意欲満々です。



訓子府町役場企画財政課
TEL 0157-47-2115
Fax 0157-47-2600

kikaku@town.kunneppu.hokkaido.jp

東北関東大震災被災者に弔意とお見舞いを

3月11日午後2時40分頃、議会休会後の会議を町長室で行っていた際、大きな揺れに見舞われました。ただちに町内の被害状況調査を指示、結果的には被害はなかったものの次々に知らされる東北関東の被害状況は未曾有の地震と津波被害、さらに福島原発による被害は心を引き裂かれる思いでした。大震災からまもなく20日を経過しようとしているものの天変地異、あまりの被害の大きさに驚愕しているのは私だけではありません。町職員全員が喪章の黒リボンを着用、さらに義援金箱を公共施設に設置、町議会の同意を得て見舞金300万円を始め支援品の取りまとめを開始したところです。町内日赤奉仕団を始め各職場地域による街頭募金活動、さらに各種行事では弔意を表し募金活動が展開されています。開催が危ぶまれた「訓子府からTPPを考えるセミナー」では東京大学鈴木教授をお招きし500名程の参加者を得て開催、多くの方から義援金が寄せられました。さらに3月27日東京江戸川総合文化センターで開催される予定だった「リコーダー全国大会」が中止になりましたが、関係者のご努力により陸別町、津別町、置戸町から全国大会出場校の小中学生が本町公民館へ集合し、素晴らしいチャリティ・リコーダー演奏会が開催されました。こうした皆様のご厚意に心からお礼を申し上げます。

3月27日、私はかつての教育姉妹町・茨城県旧関城町（現筑西市）に出向き元町長齋藤和夫氏の葬儀に出席しました。今なお続く余震、瓦屋根やブロック塀の倒壊などを垣間見ながら東北関東大震災の猛威と自然災害の恐ろしさを感じながら帰町しました。改めて



亡くなられた方や今なお行方不明の方々に鎮魂の弔意を表し、被災された皆様へお見舞い申し上げます。

町長's Eye

- 月日 3月16日(水)
- 会場 町公民館講堂
- 参加者 町民ほか480名

TPPは、第一次産業への影響はもとより、地域経済・社会に大きな影響を与えるものと懸念されます。TPP問題をきっかけに、訓子府の豊富な農産物が生み出す「食」の大切さを再認識し、あらためて「地域」や「暮らし」について考える機会として、町と町教育委員会の主催で町民セミナーが開催されました。第1部は、町内で活動する農業者による実践発表、第2部は、東京大学の鈴木宣弘教授をお招きしてTPPに関する特別講演をいただきました。



鈴木 宣弘 (すずき のぶひろ)
1958 三重県生。東大農学部卒
農林水産省、九州大学教授
現職：東大大学院農学生命科学研究科教授

第1部 実践活動報告 農業の元気が地域の元気

第2部 特別講演 TPPと私たちの食・暮らし・地域の未来

①「バレイショ期待の大型新人 スノーマーチ」

スノーマーチ普及委員会会長 洞 政義さん

100年以上歴史のある馬鈴薯に、病虫害に強い品種ができた、それがスノーマーチ。有志で普及委員会を立ち上げ、町内全戸への無料配布や、焼酎の加工などに取り組んできた。その甲斐もあり、北見市場の初せりに出品でき、コープさっぽろにも流通ができた。何より地域に支えられたのが力になった。これからはさらなる消費拡大を目指して皆で頑張りたい。



②「農産物直売所・農産物加工販売に取り組んで」

ファーマーズマーケット夢ミール代表 牧嶋重雄さん

地産地消を考えているときに、仲間から直販の声がかかり、安心・安全・新鮮な野菜を提供したいと思った。不安があったが日駅舎の野外で販売を開始したところ大盛況となり、毎月2回の販売に増えた。その後女性の協力で加工品(コロッケなど)も扱うようになり広がっている。物を販売することの大変さを感じているが、もっと関係者と連携を図り発展させたい。



③「青年農業者と仲間がつくる一日だけの地産地消レストラン」

ビストロ KUNNEPPU 代表 石川 修さん

ビストロは、地域の食材を使った一日限りのレストランである。旬の食材にこだわり、80名の客を相手に年3回開催している。スタッフは、農家4人女性4人の8人である。お客さんに直に接して、楽しんでもらい、励ましを受けたりすることが醍醐味だと感じている。生産者と消費者をつなげるのが使命と考えて活動している。今後は、知名度を上げ、地域の連携を増やして、今の訓子府を広く外に発信して行きたい。



TPPとは、FTAの一種だが、例外は認めない、物だけが対象ではないという特徴がある。第三の関税国といっているが、関税はすでに進んでおり、我が国の農産物の中で、高関税が維持されているのはわずか1割である。日本人の体の60%は輸入食材で支えている。今までの日本の貿易は、地域農業の大切さを守ってきたのに、今回の政府の対応は、交渉になっておらず、具体的な内容も示されていない。これでは、国民の議論ができるわけがない。政府は6月までに国内体制を整えるといっているが、これまでアメリカが進めてきた戦略に太刀打ちできずに、このままでは、日本の農地は雑草しか生えない状況となり、農業を失った地域社会は崩壊し、国土は荒れ果てる。これは農家保護の問題でなく、国民生活と国家存立の問題である。TPPによる自由化で国内農業が強くなるというが、それは全くの誤りであり、オーストラリアのように経営規模が2ヶタも違う相手には勝ち目はない。農家の所得補償でカバーするといっても4兆円の財源は国にはないし、輸出を見ても限られた企業にしか恩恵が無く、その利益も大きいものではない。一体誰のためのTPPなのかと言いたい。日本に必要な戦略は、まずアジアと手を結ぶことである。強い農業をつくるためには、スイスで見られる様な地域を巻き込んだ自発的農業であり、みんなでささえ合うネットワークづくりである。



北海道大学訓子府サテライト 報告会

農家世帯構造と分業・ゆとりに関する調査

平成21年6月に、訓子府町と北海道大学が農業連携で協定を締結し設置された「訓子府サテライト」の活動の一環として、昨年7月に町内農家148件を対象に行ったアンケート調査の報告会が、3月23日に町公民館で行われました。サテライトに常駐している高梨子さん(北大博士研究員)からの報告内容を紹介します。

大規模な家族構成が多く、後継者問題と無縁に思えるが、30歳を超えても配偶者を持たないという状況では、後継者問題が存在するといえる。経営者世帯は先進的な農業を確立してきた年代であり、そういう力を持った世代の陰に後継者世代が隠れがちになっているのではないかと。後継者世代は農業の新しい可能性に挑戦し、それを農家以外の人に知ってもらうことが必要である。町内で完結しない新たな事業に挑戦することが、今後の訓子府農業には大切である。